様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３１３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６４４５

研究課題名（和文）オリンピック競技大会のレガシーに関する批判的検討

研究課題名（英文）A critical study for the Olympic legacy

研究代表者
荒牧　亜衣（Aramaki, Ai）

仙台大学・体育学部・講師

研究者番号：３０５０７８５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1964年東京大会を事例に有形と無形のレガシーの関係性について解明し、実体的な概念と機能的な概念としてレガシーをとらえ直すことを試みた。また、方法として、大会招致の文脈において用いられる計画としてのレガシーと、過去の大会に対して用いられる評価としてのレガシーを明確に区別して論じることについても確認した。有形のレガシーの多くは、実体的な概念として把握される。一方で、有形のレガシーは機能的な概念として据えられることによって、より長期的なものとして存在する可能性が高い。機能的な概念としての有形のレガシーをより確実に認識させるものこそが無形のレガシーの役割であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This research examines the relationship between tangible and intangible legacies using the 1964 Tokyo Olympic Games as a case study in an attempt to redefine legacy as a substantive and functional concept. The method employed confirmed that it is possible to clearly separate for discussion the legacy as a planning concept used for bidding for the Games from the legacy as an evaluation concept using past Games. Much of the tangible legacy is conceived as substantive concept. However, conceiving of the tangible legacy as a functional concept indicates a high possibility that it is more long term. Being more firmly aware of the tangible legacy as a functional concept clearly suggests the role of the intangible legacy.

研究分野：体育・スポーツ哲学、オリンピック研究

キーワード：オリンピック競技大会　オリンピズム　オリンピック・ムーブメント　レガシー　1964年東京大会

１．研究開始当初の背景

現在、オリンピック競技大会を開催する都市は、招致活動を行う段階から、「オリンピックが何をもたらすのか」という視点に基づき、レガシーを構想することが求められるようになった。現行の招致システムにおいて、開催都市は、競技会場の建設だけでなく、都市や地域の発展を目的とした長期的な計画と一致させながら、大会の開催がその都市全体の変容をもたらすようなレガシーを計画することが義務付けられている。

オリンピック・レガシーについて言及する際に多く用いられる分類として、有形（tangible）と無形（intangible）がある。無形のレガシーの重要性は、IOC も指摘しているところであるが、視覚的に実体として確認可能な有形のレガシーに比べて、無形のレガシーは、形がないゆえに認識することが難しく、計画することや評価することも容易ではない。先行研究でも、その多くは有形のレガシーを対象に研究が進められてきた。

そこで本研究では、無形のレガシーに関する分析をねらいとして、より長期的な視点から、有形と無形のレガシーの関係性について検討する。

２．研究の目的

本研究では、1964 年に開催された第 18 回オリンピアード競技大会（以下、1964 年東京大会）を対象に、有形と無形のレガシーの関係性について明らかにし、実体的な概念と関係的な概念としてレガシーをとらえ直すことを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、次の 2 つの研究課題に取り組んだ。

(1) 研究課題 1：有形と無形のレガシーの関係性

1964 年東京大会を対象に「大会がもたらしたもの」について精査することによって、開催後 50 年を経た有形と無形のレガシーの関係性について解明を試みた。具体的には、霞ヶ丘国立競技場と代々木国立競技場、及び「東洋の魔女」に着目した。また、課題１に取り組むに当たり、その予備的考察として、1976 年モントリオール大会、2012 年ロンドン大会の事例についても検討を行った。

(2) 研究課題 2:実体的な概念と関係的な概念としてのレガシー

課題１において明らかにされた有形と無形のレガシーの関係性ついて、実体的な概念と関係的な概念としてのレガシーの視点から整理した。実体的な概念としての有形のレガシーが関係的な概念として捉えられることの意義や、有形のレガシーが関係的な概念としての機能を有するための、無形のレガシーの役割について指摘することを試みた。

なお、関係的な概念としてのレガシーについては、課題１の成果を踏まえ、機能的な概念にその枠組みを修正して研究を進めることとなった。

４．研究成果

(1) 霞ヶ丘国立競技場と代々木国立競技場のレガシー

霞ヶ丘国立競技場は第 3 回アジア競技大会と 1964 年東京大会の主会場として建設された。1976 年から 1993 年まではミラーボウル、1991 年には世界陸上選手権、1980 年から 2001 年まではトヨタカップといった各種スポーツイベントが開催されている。また、高校サッカー選手権の準決勝と決勝の会場としても長年に渡り使用されており、日本のサッカー選手にとっては、一つの「神聖な場所」として考えられていた。しかしながら、2020 年東京大会に向けた一連の動きの中で取り壊しが決定し、解体され、その実体を失うこととなる。

代々木国立競技場もまた、1964 年東京大会のために建設された。霞ヶ丘国立競技場が、新競技場の建設のために解体された一方で、今日の日本において、代々木国立競技場が解体されることは考えにくい。丹下健三による、世界的に有名な建築物であるだけでなく、代々木国立競技場は、1964 年東京大会の何らかの意味を象徴する機能を有している可能性が指摘できるからである。

例えば、南後（2014）は「メディアにおける建築」という観点から双方の競技場の違いについて指摘している。このことは、その建築的価値や利用用途もさることながら、何らかの意味づけがなされているからこそ、より長期的な有形のレガシーとして存在していることを示唆している。

(2) 実体的な概念としてのレガシーと機能的な概念としてのレガシー

有形のレガシーは、通常、実体的な概念（material concept）として認識される。霞ヶ丘国立競技場や代々木国立競技場のようなスポーツ施設は、実体的な概念として捉えうる。したがって、有形のレガシーの多くは、実体的な概念として認識される。しかしながら、機能的な概念（functional concept）として認識されることによって、これらの夕景のレガシーは将来世代に継承される可能性が高くなるのではないだろうか。機能的な概念として、有形のレガシーを認識することを推進することによって、それらは、無形のレガシーとしても取り扱われることが可能になる。

スポーツ施設のような有形のレガシーを真のレガシーとして認識するためには、実体的な概念としてだけでなく、機能的な概念としても認識する必要があると考えられる。

（3）東洋の魔女のレガシー

実体的な概念と機能的な概念について考察を進めるために、東洋の魔女を対象に有形と無形のレガシーの関係性に着目して検討を行った。具体的には、駒沢屋内球技場、東洋の魔女の象徴的存在であったと考えられる大松博文、河西昌枝を取り上げた。

実体的な概念としての、特に有形のレガシーはより長期的な視点でみると、その姿を失う可能性が高い。一方で、これらの レガシーが、機能的な概念として認識されることができたならどうだろうか。有形、無形を問わず、 それらの対象とわれわれの関係において、何らかの意味づけがなされる場合に、より長期的なレガシーとして認識することができるのではないだろうか。

有形のレガシーの多くは、実体的な概念として把握することができる。しかしながら、有形のレガシーは機能的な概念として据えられることによって、より長期的なレガシーとして存在する可能性が高いことも示唆される。さらには、機能的な概念として有形のレガシーをより確実に認識させるものこそが無形のレガシーの役割であることも指摘できる。この関係において、 無形のレガシーは、有形のレガシーをより長期的なものへと意味づける作用を持っていると考えられる。

（4）オリンピック・レガシーに対する複数の視点

オリンピック競技大会の開催候補都市が作成する開催概要計画書を筆頭に、IOC によってレガシーということばに計画的な概念として、肯定的な意味合いが戦略的に付与されたことは、国内の先行研究においても明らかになっている。例えば、舛本ら（2014）は、レガシーが、IOC において強調されるようになった背景には、否定的あるいは予期しないようなマイナス効果を避けたいという IOC の意図が推察されると述べている。また、石坂ら（2013）は、IOC が唱えるレガシーは肯定的評価に埋め尽くされた＜レガシー＞であると指摘し、これらのイメージを極力排除しながら、「遺産」という枠組みを用い、時間軸、空間軸を考慮しながら、批判的に捉え直すことを試みている。

実際のところ、海老島（2015）も懸念するように、表面的なロンドンオリンピックの成功のキーワードの一つとして捉えられた「レガシー」、IOC が開催都市の実施計画に求めている条件としての「レガシー」など様々なレガシーに関する言説が入り乱れており、特に、2020 年東京大会を控えた日本においては、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会や関連組織がレガシーということばをあたかも錦の旗印のごとく利用している現状がある。レガシーということばが多義的になればなるほど、この概念の本質はさらに曖昧になり、オリンピックのオリンピックたる所以であるその理念を置き去りにする事態を引き起こすことすら危惧される。

（5）＜計画としてのレガシー＞と＜評価としてのレガシー＞の区別

オリンピック・レガシーについて、その中心的意味合いを整理するならば、「オリンピック競技大会によってもたらされるもの」と捉えることができるだろう。

レガシーに関する視点が複数あること、その意味が多様化していることはすでに指摘した通りである。本研究では、レガシー研究における方法として、＜計画としてのレガシー＞と＜評価としてのレガシー＞の２つの視点に切り分け、明確に区別して論じる必要があることについても確認を行った。前者は、IOC を中心に肯定的意味合いが戦略的に付与され、広く認識されるようになった計画的な概念としてのレガシーであり、将来のオリンピック競技大会に対して用いられるものである。後者は、過去に開催されたオリンピック競技大会の文脈において用いられるものであり、大会によってもたらされたものを評価する枠組みを念頭に置いている。

＜評価としてのレガシー＞を精緻に分析し、その内容をフィードバックすることによって、＜計画としてのレガシー＞について再考を加えることが可能になるだろう。

（6）オリンピック・ムーブメントに貢献するレガシー

IOC によれば、レガシーは大きく、招致都市にもたらされるものと、オリンピック・ムーブメント全体にもたらされるものの 2 つに分けられる。また、IOC はオリンピック・ムーブメントにもたらされるレガシーのほとんどは、無形のレガシーであることも言及している。本研究では、オリンピック・ムーブメントにもたらされる無形のレガシーについて考察を進めるために、1964 年東京大会の聖火リレーと 2020 年東京大会に向けて積極的に展開されているオリンピック・パラリンピック教育についても検討を行った。

連帯や平和といった大会コンセプトを象徴する聖火リレーは、その開始時点から、軍事的、政治的目論見を孕んでいた。1984 年ロサンゼルス大会以降、商業化が加速し、大会自体が肥大化していく過程においては、聖火リレーもその例外とはならず、選択されるルートは、技術力だけでなく、国力を世界中に発信するツールとしても理解されるようになった。一方で、聖火リレーそのものに目を向けてみると、開催都市だけでなく、開催国、あるいは周辺地域に暮らす多くの住民にとって、大会に触れる貴重な機会であることに間違いはない。例えば、1964 年東京大会の開会式や競技を観戦することが叶わなかった人たちにとって、自分が暮らす地域を通過した聖火リレーを目撃したことは、開催国の一員として大会に参画したことを示す記憶の 1

ページとなっているからである。聖火リレーは、この意味において、オリンピック・ムーブメントに貢献する無形のレガシーを探る有効な手立てであると指摘できる。

2020年東京大会に向けては、複数の実施主体がオリンピック・パラリンピック教育を展開している。2020年東京大会組織委員会が実施する事業認証のような形式の教育プログラムの展開は、近年、オリンピック競技大会が開催都市、開催国にもたらすであろう無形のレガシーを構想、計画する視点からも重視される傾向にあるといってよい。オリンピック・ムーブメントの理念や使命からすれば、確かに無形のレガシーとして教育プログラムを明確に位置づけることの意味は容易に理解できる。しかしながら、例えば、井谷（2015）がLensly, H.Jのオリンピック教育批判を参考に、日本で行われているオリンピック教育の批判的検討を試みたように、開催都市、開催国としてオリンピック・パラリンピック教育に取り組む以上は、より多角的な視点で教育プログラムそれ自体を検証していく責務があるのではないだろうか。

＜引用文献＞

石坂友司，松林秀樹、＜オリンピックの遺産＞の社会学：長野オリンピックとその後の10年、青弓社、2013、20-23

井谷惠子、オリンピック・パラリンピック教育の批判的検討：Lenskyj, H.J.によるオリンピック教育批判から、日本体育学会大会予稿集、66、2015、362-363

海老島均、特集オリンピック・レガシーを巡る言説・実像：特集のねらい、スポーツ社会学研究、23（2）、2015、23

南後由和、東京オリンピックに向けたスケッチ：都市とスポーツ、現代スポーツ評論、30、2014、105

舛本直文、本間恵子、無形のオリンピック・レガシーとしてのオリンピックの精神文化、体育・ スポーツ哲学研究、36(2)、2014、97-107

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①荒牧亜衣、オリンピック・レガシーを問う、体育哲学研究、査読無、47巻、2017、67-70

②荒牧亜衣、日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の現状と課題、オリンピックスポーツ文化研究、査読無、2 巻、2017、99-104

〔学会発表〕（計５件）

①Ai Aramaki、Memory as an Intangible legacy: Analysis Based on 1964 Tokyo Games Torch Relay Materials、2018 Center for Sociocultural Sport and Olympic Research’s annual conference、2018

②Hisashi Sanada、Akiyo Miyazaki、Ai Aramaki、Taro Obayashi、Spreading Olympic Education for Tokyo 2020、International Colloquim of Olympic Study and Research Center、2016

③Ai Aramaki、Potential for Olympism: Perspectives from a more expected of Olympic Education in Japan、スポーツ哲学セミー2016、2016

④荒牧亜衣、オリンピック・レガシーを問う、日本体育学会第67回大会、2016

⑤荒牧亜衣、和田恵子、鈴木惠千代、土屋龍一郎、白取史之、井上裕太、小杉卓正、渡辺創、オリンピック・ムーブメントとこれからのミュージアムを考える、第38回JOAセッション、2015

〔図書〕（計２件）

①荒牧亜衣、石塚創也、大野益弘、黒須朱莉、嵯峨寿、真田久、佐野慎 輔、高橋怜美、田尻格、田原淳子、藤原庸介、舛本直文、松原茂章、山 本尚央子、結城和香子、來田享子、和田浩一、メディアパル、JOA オリンピック小事典：オリンピック・レガシー、2016、360（66-67）

②清水諭、友添秀則、舛本直文、藤浪康史、吉本光宏、和田浩一、五十殿 利治、吉田寛、川畑直道、江口みなみ、岡邦行、白井宏昌、荒牧亜衣、 高橋良輔、田原和宏、細川暁子、下竹亮志、創文企画、現代スポーツ評論：オリンピックにおける文化イベント、2016、164（128-133）

６．研究組織

(1)研究代表者

荒牧亜衣（Aramaki Ai）
仙台大学・体育学部・講師
研究者番号：30507851